

三位一体主日(Trinity Sunday) Part2

細井 茂徳

先週、私たちは聖霊降臨日(ペンテコステ)礼拝を共に守りました。翌週の今日は、教会の暦で「三位一体主日」と呼ばれ、父と子と聖霊、この三者が三つにして一つなる神であられることを特に覚える日曜日と定められています。どうしてこのような日曜日を設けるのでしょうか。そもそも「三位一体、何それ？」と一般の人の中には、数年前に日本の首相が推し進めようとしていた政治改革のこと(三位一体構造改革)を思い浮かべる方もおられるかもしれません。どうしてそんな日があるのかあまりピンと来ないという方もおられるでしょう。

実はこの日が備えられているのは、それは古く古代教会の時代から、この神の本質について疑う多くの人が現れ、これに関する偽の教えが起り続けているからです。またそれは数多くある聖書の偽の教えの中でも致命的な、つまり**“救い”にかかわる重大な問題である**からなのです。伝統的なキリスト教信仰に異を唱える人たちはいつの時代にもいました。「キリストは神のような存在ではあるが、あくまで被造物にすぎない」と主張する者も後を絶ちませんし、「三位一体の教えは教会が後になって生み出したもので聖書そのものの教えるところではない」と主張する者も繰り返して起こっています。今日最もよく知られているものとしてモルモン教、旧統一教会、またものみの塔(エホバの証人)等を挙げることが出来ます。神は確かに唯一なるお方です。聖書はそのことを繰り返し記しています。それでいながら尚、聖書はイエスや聖霊を神と証しするのです。主イエスと聖霊は父なる神と区別されながら、父と同じ性質を持つお方、父なる神と親しい交わりのうちに永遠に存在しておられる「独り子の神」「霊なる神」であられると教えているのです。4世紀以降、教会はこれを信条に認め受け継ぐようになりました。三位一体の教えは妥協が許されるようなものではありません。これなしには、人が救われ神を正しく礼拝することができないのです。

Part1は週報 No.2929 に記載